

ユダヤ・イスラエルに思う⑧ マサダは二度と陥落せず

長谷川 修

マサダの要塞は、死海の西岸一五kmにあつて、岩山に屹立する高さ四百m程の砦で、一世紀後半のユダヤ戦争の最終舞台となった。ローマ軍の徹底的な破壊により所在が分からなくなっていたが、一九世紀にドイツの考古学者によって発見・特定された。

ユダヤ戦争は、ユダヤの対ローマ反乱であり、終末論的な雰囲気の中で武力解放を目指す長く激しい戦いだった。ローマ軍によってエルサレムの街は封鎖され、飢餓地獄に陥った住民全員の逮捕と、改築されたばかりの第二神殿の炎上・崩壊で決着した。

この折、追い詰められた過激派集団の「熱心党シカリ派」が逃げ込んだのが、マサダの要塞である。そこは、聖書の幼児虐殺物語りで悪名高いヘロデ大王が要塞兼離宮として再建した所で、潤沢な水と食料を保管する設備を備え、籠城には最適の場所だった。

さすがのローマ軍も「天空の要塞」を攻めあぐむが、ユダヤ人奴隷を動員して、谷間を埋め、登り道を作り、遂に土壁を破壊する。そして総攻撃の前夜、ユダヤ側では捕虜になるよりもと、九六〇人全員の集団自決を決めた。まずは自分の妻子を殺害し、次に籤を引いて選ばれた一〇人が他の兵士を殺し、最後にもう一度籤を引き、残った一人が九人を殺し自裁する。ローマ兵が乗り込んだ時には遺体の山で、生きていたのは女性二人と子供五人だった。

この間の事情を書き残したのが、ユダヤ人歴史家ヨセフスである。貴族祭司の子ヨセフスは戦争で捕虜となったが、その後ローマ皇帝の庇護を受けローマに住み、『ユダヤ戦記』等を著わした。ユダヤ人の間では裏切り者として評判が悪かったが、一九六〇年代の発掘調査で、人名を書いた籤の陶片が出てき、また自決した家族の人骨が発見されたことで、『戦記』の記載は真相を伝えており、ユダヤ精神の伝承者として評価する人もいる。

イスラエル国防軍の入隊宣誓式は、毎年マサダ要塞の山頂で行われ、その際唱和するのは「マサダは二度と陥落せず」だそうだ。